

## 研究論文 (Articles)

# ボランティア活動を通じた学生の「学び」のイメージ —2007年度立命館大学学生意識調査を事例として

山 田 一 隆・井 上 泰 夫

(立命館大学政策科学部・立命館大学ボランティアセンター)

## What Do Students Learn from Volunteer Activities? An Empirical Study Based on Students' Consciousness Survey in Ritsumeikan

YAMADA Kazutaka and INOUE Yasuo

(College of Policy Science, Ritsumeikan University/Volunteer Center, Ritsumeikan University)

The goal of this article is to show what students learn from volunteer activities. To realize this goal, we analyzed data accumulated by the Ritsumeikan Volunteer Center in 2007, through a questionnaire about students' consciousness concerning volunteer activities. The analyses identified a relationship between the images and the output of students' learning. The most important factor for students deciding to volunteer was to feel an image of pleasure. A pleasurable image encouraged students to participate in volunteer activities. Images of responsibilities were necessary so students could understand the need of being able to "plan and arrange" as well as to "express themselves", both of which are objectives of these experiences. The images of accomplishment, self-growth and carrying out societal related activities gave the students self-confidence through the receiving of thanks from others. This article also shows a model. The model expresses the thoughts of service-learning, which cultivate learning in specific areas through intentionally structured opportunities. This model shows how local communities that receive these students and the universities that send them out can collaborate to share the common educational aims of allowing these students to plan their study goals, while encouraging the students' awareness of community issues and the planning of their own futures.

**Key Words** : volunteer activities, service-learning, students' learning, images, students

キーワード : ボランティア活動, サービスラーニング, 学び, イメージ, 学生

### 第1節 はじめに

#### (1) 高等教育機関におけるボランティア活動 の支援

大学生によるボランティア活動は、2002年中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活

動の推進方策等について(答申)」を経て、2005年同答申「我が国の高等教育の将来像」に至って、単位認定化する大学が出現するなど、大学教育にインパクトを少なからず与えている。その背景には、大学側の事情と学生側の事情の双方が考えられる。学生側の事情としては、

佐藤（2000）に拠れば、「学生たちの直接的経験の範囲は、近年あまりに面的で狭い分野に限られるようになり、そのために大学の授業がいかにか巧みに行われても、彼らにその狭さを超えて考えるよう導くのが困難になってきている」。また、「生きた経済の体験と彼らが受ける教育がうまく結びついていない」のであり、学生の直接的経験を広げ深め、座学との接点を見出してやる仕掛けが大学には求められているのである。

日本学生支援機構（2005）の調査結果に拠れば、「学内においてボランティア情報の提供・ボランティア活動の相談等の担当部署」はあるものの、そのほとんどは「ボランティアを担当する部署はあるが、部署および担当者は他の業務と兼務している」（国公立92.9%，私立86.6%）。「専任スタッフを有する専門の部署がある」と答えたところはわずか国公立の0.65%，私立の2.8%に過ぎない。また、「ボランティアを担当する部署があり、部署の中にボランティア業務専任の担当者がある」と回答しているところは、国公立が0.6%，私立が2.8%となっている。併せても、ボランティア業務専任の担当者を置いている大学等は、国公立の1.2%，私立の5.6%程度である。

こうしたボランティア活動担当窓口では、どのような業務が行われているのであろうか。同調査によれば、担当窓口を置いている大学等の8割近くで「ボランティア情報の収集・提供」（77.8%。複数回答。以下同）がなされている。これはボランティアコーディネートの最も基礎的な業務であり、いわば、消極的なボランティアコーディネートといえる。しかし、それ以外の積極的なボランティアコーディネート業務を行っている大学については、割合が格段に落ちている。例えば、直接的なボランティアコーディネートを行っている大学等はかろうじて3割を超えている（「ボランティア希望者と受け入

れ先との需給調整」を行っている窓口は31.4%）が、企画を実施している大学等は1割程度か、それ未満である（「学内ボランティア活動の企画・実施」が12.6%。「ボランティア講座・セミナー等の企画・運営」が6.8%）。

立命館大学ボランティアセンターでは、教育的な見地からサービスラーニングの手法を用いてボランティア教育プログラムを展開している。筆者らの一人は、コーディネーターとして日常的にボランティア活動支援や情報発信を行っており、これらの支援を通して、学生がボランティアに関する意識は高く、活動を通して得られる成果への期待も大きいことを実感している。このような学生がボランティア活動に参加するとき、彼らはさまざまな「学び」の成果を期待している。ボランティアセンターは、学生がボランティア活動を通して「学び」を深めるための支援を行うために、ボランティア活動と「学び」の連関のメカニズムに関する知識を必要としている。それは、ボランティア教育科目群の教育目的の設計や学習者の学習目標の策定を支援するコーディネーターにとって、大きな示唆を与えるものであるからである。

そこで、本稿は、「ボランティア活動から学生は何を学ぶのか」を明らかにすることを目的とし、立命館大学における調査の分析から本稿の目的に応える考察を展開したいと考えている。

## 第2節 2007年度立命館大学学生意識調査

### 1. 調査概要

#### （1）調査の背景

立命館大学ボランティアセンター（衣笠）は、ボランティア活動を通じた教育的プログラムの開発・実施を担う機関として2004年に開設された。本学でボランティア教育の推進を図るためには、現在の学生のボランティア活動の実態と、

その意識についての把握が欠かせない。ボランティアセンターではすでに2005年度に学部生を対象にアンケート調査を実施している。しかし、このときから2年を経過しており、改めて調査を行い、学生の意識や行動の変化、そしてそこへ本学のボランティア教育の取組がどのように影響しているのかを分析する必要がある。そこで、2007年、本学学生がボランティアにどのような関心を持ち、どのような活動を行っているのかを明らかにするための意識調査を行った（以下、この調査を「2007年度調査」という）。

### （2）調査対象者

- 1）本学学部生（法学部・産業社会学部・国際関係学部・文学部・政策科学部・映像学部・経済学部・経営学部・理工学部・情報理工学部）
- 2）本学大学院生（法学研究科・社会学研究科・国際関係研究科・政策科学研究科・文学研究科・応用人間科学研究科・言語教育情報研究科・先端総合学術研究科・経済学研究科・経営学研究科・理工学研究科・テクノロジー・マネジメント研究科・公務研究科）
- 3）本学専門職大学院生（法務研究科・経営管理研究科）
- 4）科目等履修生および聴講生

### （3）調査時期

2007年12月21日-2008年1月17日

### （4）調査方法

#### 1）標本抽出方法

母数：学部・大学院（科目等履修生・聴講生含む）（2007年10月1日付）35,105名。

抽出方法・抽出数：学生証番号順に8名毎の系統抽出。4,380名。

抽出率： $4,380/35,105 = 12.48\%$

#### 2）回収標本数

全学生に対する割合  $792/35,105 = 2.25\%$

配布数に対する割合  $792/4,380 = 18.08\%$

#### 3）調査方法

質問紙郵送方式

## 2. 調査結果の主な概要

### （1）調査回答者の属性

本調査では、まず回答者の属性を把握するために「性別」「学部」「回生」「ボランティアセンターへの関与」についてそれぞれ質問した。その結果、男女比では、やや男性が多く、学部では、文学部、産業社会学部の回収率が高い。また、回生別に見ると、1回生の回答率が29.5%と比較的高い傾向が見られる。ボランティアセンターとの関わりを見ると、センターについて知っている学生が56.7%、知らない学生が43.3%であった。

### （2）ボランティアに関するイメージについて

ボランティアに関するイメージについて、回答のうち、「とてもそう思う」「そう思う」の合計が多いものは、「自発的」「達成感」「自分が成長する」「社会の役に立つ」である。また、回答のうち、「あまり思わない」「全く思わない」の合計が多いものは、「おせっかいな」「偽善的な」「気軽にできる」「遊び感覚の」「恥ずかしい」である。一方で、「気軽にできる」や「遊び感覚の」というイメージは少なく、ボランティアは簡単に取り組めるものではない、と考えられていることがわかる。

以上のことから、本学学生は、ボランティアに関して「社会の役に立つ」「自発的」な行為であり、活動には「達成感」が伴い、結果として「自分が成長する」というイメージをもっていると推察できる。

### （3）ボランティア活動に関する情報について

ボランティア活動を知ったきっかけや、ボランティアを始める際の情報を収集するとき、学生はどのような方法でボランティアに関する情報を収集しているのかについて見ると、ボラン

ティア活動を知ったきっかけとしては、「テレビ」が最も多く、続いて「友人・知人から話をきいて」が多い。ボランティア活動を始めるときの情報源では、「友人から話を聞いて」が最も多く、すでにボランティア活動に携わっている学生からの情報発信が大きな効果を生んでいると考えられる。

#### (4) 関心のあるボランティア分野

本学学生が最も高い関心を示しているボランティアの分野は、「環境」で、46.7%とおおよそ半数近くの学生がこの分野での活動に何らかの興味をもっている。次いで「国際交流・国際協力」(37.1%)、3番目に「児童福祉」(32.4%)と続いている。ジャンルでみると、総じて福祉分野のボランティアへの関心が高い傾向がみられる。

#### (5) 大学入学前のボランティア活動経験について

本学では、40.8%の学生が大学入学前に何らかの形でボランティア活動に参加した経験をもっている。その活動時期については、「中学校」が最も多く、37.1%の学生がボランティア活動に参加している。分野については、「環境」が最も多く(29.0%)、次いで「高齢者福祉」が多い(19.3%)。これらの活動の形態についてであるが、「授業の一環」が多く(25.3%)、次いで「学校外の団体」が多い(21.8%)。また、活動期間では「単発」が62.7%と圧倒的に多い。しかし、一方で3年以上継続して活動をしている学生も、11.7%いる。

#### (6) 大学入学後のボランティア活動について

40.8%の学生が大学入学前にボランティア活動に参加している一方、大学入学後に活動を行った学生は28.8%である。その中でも、「現在している」学生については11.1%と大幅に減少している。しかし、大学入学後のボランティア活動の分野は多岐に亘っており、最も多いのは「障害児・障害者支援」である(17.1%)。次いで、

「国際交流・国際協力」(15.0%)、「児童福祉」(13.5%)と続く。大学入学前に最も活動が多かった「環境」について、ここでは8.8%となっている。

活動の形態については、「学校外の団体」が多く、32.4%の学生が学外のボランティアグループ、NPO、NGOから活動に参加している。活動期間については、「単発」が最も多く、40.2%を占めている。次いで「3年未満」が16.1%となっており、一回きりの活動と長期的に継続する活動に二分している傾向がある。また、これらの活動が大学での「学び」や今後の進路に与える影響については、43.6%の学生が「ある」または「少しある」と答えている。しかし、「あまりない」と「全くない」を合計すると43.6%の学生がどちらかということと関係がないと考えており、ボランティア活動経験者の中でも意識は二分されている。

#### (7) ボランティア活動で得た成果

ボランティア活動の成果として、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が多かったのは、「感謝」と「楽しさ」である。次いで、「身近な地域への関心」「出会い」「社会への理解」が約60%前後で同率となっている。また、ボランティア活動を通して得られないと考えられているのは、「キャリアビジョン」と「社会的評価」である。

### 第3節 分析手法と分析視角

#### 1. 「入口」イメージと「学び」の成果意識

##### (1) 「入口」イメージ

前節では、2007年度調査の結果概要について紹介した。本節以降では、もう少しつっこんだ分析を加えてみたい。そこで、本調査では、被験者全員に対して、ボランティアに対する意識を問うべく、「ボランティア活動の現状についてのイメージについてお聞きします」という問

いを設け、15項目について、「とてもそう思う」「やや思う」「どちらともいえない」「あまり思わない」「全く思わない」の5段階評価を求めている。これは、ボランティア活動経験者も未経験者も回答していることから、ボランティア活動に対するイメージと捉えることができる。活動に従事したことがある学生が圧倒的に少ないことを考え合わせると、活動に向かう「入口」段階でのイメージといえる。これを以降では「入口」イメージということにする。

## (2) 「学び」の成果意識

本稿の目的は、題目どおり「ボランティア活動から学生は何を学ぶか」を考えることにあるが、では、「学び」とは何であろうか。高等教育学ないし大学教育学における「学び」の議論は枚挙にいとまがない。管見の限りではあるが、社会学における言説では、レイブとヴェンガー(1991=1993)に拠れば、「学習に関する従来の説明では、知識が「発見される」にせよ、他人から「伝達される」にせよ、あるいは他人との「相互作用の中で経験される」にせよ、そのような知識が内化する過程を学習とみなしていた。」つまり、「学び」とは、学習の過程を通じて内化された知識であるということになる。高等教育学ないし大学教育学においては、溝上(2004a)が、1960年代には周延的議論であった大学での学業問題は、現代との関連において積極的に論じていく必要性を指摘している。文部科学省においても、「学士力」、経済産業省においても、「社会人基礎力」という言い方で、学生の「学び」を質的に保証する必要があると指摘している。溝上(2006)に拠れば、「大学生の目指すべき勉強を「自分なりの見方や考え方を持つ」「自分を発展させる勉強」と定義」している。また、溝上(2004b)では、学習スキルのみならず、学生の学習動機も学生の学びを支えるものとして指摘している。佐藤ら(2006)は、溝上(2004b)にいう「学習スキル」を「ア

カデミック・スキルズ」として取り上げ、大学生が習得すべき知的技法について紹介している。

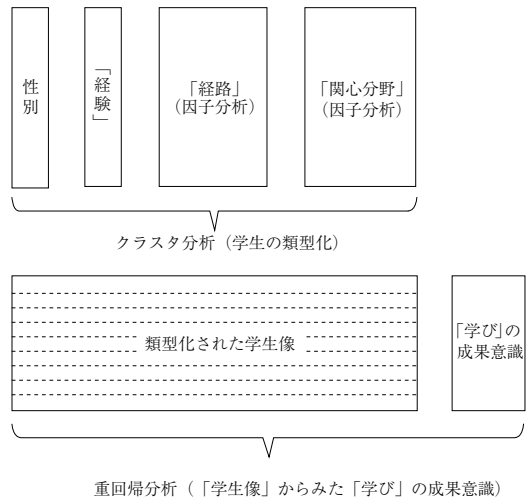
このようにみてくると、溝上(2004a, 2004b, 2006)に代表されるような学習への動機づけや気づき、クリティカルシンキングといった学生の内的知識世界に関わる情動的な「学び」と、佐藤ら(2006)に代表されるような大学生の学び方に関する入門書に書かれているノートの取り方やレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方、図書館の利用を含めた情報リテラシーなどの技能的な「学び」との2つが大きくは論じられてきたことがわかる。本稿においては、2007年度調査の分析を通して学生の「学び」を明らかにすることが目的であるので、2007年度調査における質問項目の設け方に翻る必要がある。本調査においては、ボランティア活動経験者に限定して、「あなたがこれまでのボランティア活動で得た成果や、活動してよかったことについてお聞きます」として、12項目について、「とてもそう思う」から「全く思わない」までの5段階評価を求めている。12項目とは、「身近な地域に関心持てるようになった」「活動相手や他の人から感謝された」「新たな友人や知人との出会いがあった」「楽しかった」「社会の現実や課題の理解が深まった」「自信が持てるようになった」「将来の方向性や就きたい仕事が見つかったり、より明確になった」といった情動的な「学び」が7項目、「イベントや活動などを企画・調整できるようになった」「自己表現能力(プレゼンテーション能力)が高まった」「学校での評価、進学や就職に有利になった」「問題解決能力が高まった」「人間関係が上手に持てるようになった」といった技能的な「学び」が5項目含まれている。本稿に関して、「学び」とは、情動的な「学び」も技能的な「学び」も含むものとして捉え、ボランティア活動経験学生自身による自己評価である

ことから、以降、「学び」の成果意識ということばを用いることにしたい。

## 2. 学生意識と学びの関連

山田・井上（2009）では、「入口」イメージと「学び」の成果意識には、ある程度の関連性が看取されることが把握された。本稿では、ボランティア活動から学生は何を学ぶのかについて、もう少し深めるべく多変量解析を用いた分析を行ってみたい。山田・井上（2009）から、「入口」イメージと「学び」の成果意識の間には、相関がみられることが明らかとなっており、「入口」イメージと「学び」の成果意識に関する変数を同時に投入した場合、多重共線性を生じる可能性が高い<sup>1)</sup>。そのため、行動を惹起させる情報源を「経路」とし、ボランティア活動に取り組みたいと考えている分野を「関心分野」とし、それぞれについて因子分析を行った。さらに、各サンプルが得る因子得点と、入学前後のボランティア活動経験を「経験」とし、それに性別を加えた変数でクラスタ分析を行い、学生像の類型化を行った。その上で、それぞれのグループについて、「学び」の成果意識との関連を検討するため、重回帰分析を行った。以上の分析手順および分析視角を図にしたものが第1図である。

これによって、いかなるタイプの学生が、いかなる「学び」の成果意識をどのような要因で抱いているのか、を把握することができ、実践面では、ボランティアセンターなどでのコーディネート業務に示唆を与えるモデルを構築することが可能となると考えている。



第1図 分析手法と分析視角

## 第4節 「経路」と「関心分野」

学生がボランティア活動に従事しようとする際の情報源を「経路」とし、関心のある分野を「関心分野」として、それぞれ因子分析を行う。本稿の多変量解析で用いているのは統計解析ソフト「SPSS ver.16 Base」パッケージであり、本節の分析においては、同パッケージの因子分析のうち主因子法を用い、バリマックス回転を施した。

### 1. 「経路」

「経路」に関する因子分析で投入した変数は、12変数である<sup>2)</sup>。すなわち、「あなたがボランティア活動を始めるとき、どのような方法でボランティア情報を得ますか」との問いに設けた回答選択肢のうち、「その他」を除いたものであり、「雑誌、新聞を読んで」「テレビを見て」「インターネット・携帯サイトから」「教員に紹介されて」「地域の回覧板や掲示板を読んで」「都

1) 実際、「入口」イメージと「学び」の成果意識について、「楽しい」「楽しさ」を制御変数とした偏相関係数行列を求めたところ、「入口」イメージ、成果意識のそれぞれの変数相互間で比較的弱いないし比較的強い相関がみられた。

2) なお、当該12変数について、相関係数行列を作成したところ、多重共線性を生じるような絶対値の大きな相関係数は、10%有意水準で検出されなかった。

第1表 「経路」に関する因子分析結果

	因子				
	1 一般メディア系	2 専門情報系	3 地縁情報系	4 家族・友人系	5 教員・キャンパス系
雑誌・新聞_情報	.871	.028	.096	.041	-.155
テレビ_情報	.384	-.067	.059	-.061	.031
インターネット・携帯サイト_情報	.104	.066	.038	-.073	-.217
教員の紹介_情報	.003	-.001	-.013	.186	.305
地域の回覧板や掲示板_情報	.023	-.022	.452	.014	-.046
地域の広報誌_情報	.121	.073	.549	-.042	.013
ボランティア情報誌、機関紙_情報	-.070	.611	.084	-.009	-.155
イベントへの参加_情報	.032	.295	.036	.064	.140
ボラセン_情報	-.041	.470	-.053	-.058	.037
ボラセン以外の学内で_情報	.019	.080	.004	-.049	.249
友人_情報	-.061	-.017	-.126	.316	.020
家族・親戚_情報	.017	.023	.136	.508	.091
累積寄与率	7.87%	13.73%	18.45%	21.91%	24.27%

道府県、市区町村などの広報誌を読んで」「ボランティア情報誌、機関誌を読んで」「ボランティア関係のイベントに参加して」「ボランティアセンターで情報を知って」「ボランティアセンター以外の学内の窓口で」「友人から話を聞いて」「家族・親戚から話を聞いて」の12変数である。

因子分析の結果、第1表のように、5つの因子が抽出された。累積寄与率は24.3%であり、説明力の高い結果を得ることができなかった。活動を始めるための情報源は1種類ではなく、複数の情報源から活動することを決意するものと推察される。

因子の解釈を行ってみる。第1因子では、「雑誌・新聞」、「テレビ」の固有値の絶対値が大きい。第1因子は「一般メディア系」であると解釈される。第2因子では、「ボランティア情報誌、機関紙」、「ボランティアセンター」の固有値の絶対値が大きい。第2因子はボランティアの「専門情報系」であると解釈される。第3因子では、「地域の回覧板や掲示板」「地域の広報誌」の固有値の絶対値が大きい。第3因子は「地縁情報系」であると解釈される。第4因子では、「友人」「家族・親戚」の固有値の絶対値が大きい。第4因子は「家族・友人系」からの情報と解釈さ

れる。第5因子では、「教員の紹介」「ボラセン以外の学内」の固有値の絶対値が大きい。第5因子は「教員・キャンパス系」からの情報と解釈される。

以上のように、学生がボランティア活動に従事する「経路」としての情報源は、「一般メディア系」「専門情報系」「地縁情報系」「家族・友人系」「教員・キャンパス系」の5因子に拠るものと考えられる。ただし、本因子分析の累積寄与率はそう高いことから、5因子はあくまで目安のようなものであって、実際は、様々な情報源からの情報を勘案して活動に従事することを決断するものと推察される。

## 2. 「関心分野」

「関心分野」に関する因子分析で投入した変数は、15変数である<sup>3)</sup>。すなわち、「あなたはどのようなボランティア活動に関心がありますか」との問いに設けられた回答選択肢のうち、「その他の活動」を除いたものであり、「高齢者福祉」「障害児・障害者支援」「児童福祉」「母子・父子家庭支援」「医療支援」「エスニック問題」「災

3) 当該15変数について、相関係数行列を作成したところ、多重共線性を生じるような絶対値の大きな相関係数は、10%有意水準で検出されなかった。

害救援」「まちづくり推進」「文化・芸術活動」「スポーツ・レクリエーション」「環境」「人権擁護・平和推進」「国際交流・国際協力」「男女共同参画推進」「農村支援」の15変数である。

因子分析の結果、第2表のように、5つの因子が抽出された。累積寄与率は25.8%であり、説明力の高い結果を得ることができなかった。学生は、多様な関心を持っていることを裏付けているものと考えられる。

因子の解釈を行ってみる。第1因子では、「障害児・障害者支援」「児童福祉」「母子・父子家庭支援」「医療支援」の固有値の絶対値が大きい。第1因子は「福祉・医療系」とであると解釈される。第2因子では、「国際交流・国際協力」「人権擁護・平和推進」の固有値の絶対値が大きい。第2因子は「多文化共生系」とであると解釈される。第3因子では、「高齢者福祉」の固有値の絶対値が大きい。第3因子は「高齢者福祉系」とであると解釈される。第4因子では、「災害救援」「環境」の固有値の絶対値が大きい。第4因子は「災害・環境系」とであると解釈される。第5因子では、「まちづくり推進」の固有値の絶対値が大きい。第5因子は「まちづくり系」であ

ると解釈される。

以上のように、学生が関心を持っているボランティアの活動分野は、「福祉・医療系」「多文化共生系」「高齢者福祉系」「災害・環境系」「まちづくり系」の5因子に大別されることが考えられる。ただし、本因子分析の累積寄与率はそう高くないことから、5因子はあくまで目安のようなものであって、実際は、多様な関心を持っているものと推察される。

## 第5節 学生像の類型化

### 1. 学生像の類型化

前節では、学生がボランティア活動に従事しようとする際の情報源を「経路」とし、関心のある分野を「関心分野」として、それぞれ因子分析を行い、説明力はいずれも弱いものであったが、いくつかの因子を抽出することができた。本節では、それらの因子に加え、大学入学前後のボランティア活動経験や性別を加味したクラスタ分析を行い、学生像の類型化を試みたい。

本クラスタ分析に用いた変数は第3表の12変数である。本分析では、クラスタ分析のうち

第2表 「関心分野」に関する因子分析結果

	因子				
	1	2	3	4	5
	福祉・医療系	多文化共生系	高齢者福祉系	災害・環境系	まちづくり系
高齢者福祉_関心	.158	.031	.769	.160	-.043
障害児・障害者支援_関心	.447	-.002	.315	.016	-.024
児童福祉_関心	.369	.030	.303	-.087	.095
母子・父子家庭支援_関心	.586	.107	-.003	.084	.085
医療支援_関心	.358	.107	.077	.341	-.045
エスニック問題_関心	.063	.418	.031	-.045	.016
災害救援_関心	.129	-.061	.045	.528	-.011
まちづくり推進_関心	-.016	.019	.092	.174	.530
文化・芸術_関心	-.006	.259	-.067	.013	.337
スポーツ・レクリエーション_関心	.065	-.121	-.037	-.028	.251
環境_関心	-.095	.157	.014	.396	.132
人権擁護・平和推進_関心	.113	.353	.044	.098	-.037
国際交流・国際協力_関心	-.024	.527	-.040	.095	.004
男女共同参画推進_関心	.201	.236	-.021	-.033	.240
農村支援_関心	-.007	.252	.061	.237	.203
累積寄与率	6.14%	11.68%	17.10%	21.79%	25.76%



第3表 クラスタ分析投入変数一覧

変数	
情報経路	一般メディア系 専門情報系 地縁情報系 家族・友人系 教員・キャンパス系
関心分野	福祉・医療系 多文化共生系 高齢者福祉系 災害・環境系 まちづくり系
基本属性	入学前後のボランティア活動経験 性別

ward法を用いた<sup>4)</sup>。

クラスタ凝集過程より、6つのクラスタに分割するのが適当であると判断されたため、類型化された学生像は6つのグループとなった。第4表は、各グループにおける各投入変数の因子得点ないし回答選択肢の平均値を示したものである。これに拠れば、第1グループでは、「一般メディア系」の因子得点平均が6グループで最も高い。大学入学前後のボランティア活動経験は、全サンプルの平均（2.104）よりも小さいことから、活動したことがない学生が比較的多いものと推察される。これらから、第1グループは、「一般メディア」からの情報によって活動する蓋然性が高いグループと考えることができよう。第2グループでは、「教員・キャンパス系」を除くすべての因子得点平均が負値であり、活動経験の平均も6グループで最も小さい。これらから、第2グループは、ボランティア活動そのものにあまり関心を抱いていないグループであると考えられよう。第3グループでは、「教員・キャンパス系」の因子得点平均の絶対値が比較的大きい。また、大学入学前後のボランティア経験の平均も6グループで最も大きい。これらから、第3グループは、

教員やキャンパス内の情報源から情報を得てボランティア活動を経験したグループであると考えられよう。第4グループでは、「高齢者福祉系」の因子得点平均の絶対値が6グループで最も大きい。ボランティア活動経験も、第3グループに次いで大きくなっている。また、性別は全サンプルの平均（0.457）<sup>5)</sup>よりも大きくなっており、女子学生の割合が高いとみられる。これらから、第4グループは高齢者福祉系のボランティア活動に従事したことがある、相対的に女子学生が多いグループと考えることができよう。第5グループでは、「専門情報系」の因子得点平均の絶対値が6グループで最も大きく、ボランティア活動経験も平均よりも若干大きい。性別の平均も6グループで最も大きい。これらから、第5グループは、ボランティア活動に関する専門情報を得て、活動に従事したことがある、相対的に女子学生が多いグループと考えることができよう。第6グループでは、「家族・友人系」「福祉・医療系」「災害・環境系」の因子得点平均の絶対値が最も大きい。反面、活動経験は平均よりも小さく、性別の平均は6グループで最も小さい。これらから、第6グループは、身近な人間関係から情報を得て、福祉や環境分野に関心は持っているものの活動経験はあまりない、相対的に男子学生が多いグループであると考えられよう。

## 2. 各グループの「学び」の成果意識

本項では、前項で得られた学生像の類型ごとに、「学び」の成果意識について、いかなる相違がみられるのかを検討する。そのために、「学び」の成果意識を従属変数とし、第3表に掲げた12変数を独立変数として、グループごとに重

4) 当該12変数について、相関係数行列を作成したところ、多重共線性を生じるような絶対値の大きな相関係数は、10%有意水準で検出されなかった。

5) 性別は「男性」を0、「女性」を1としてダミー変数化しており、その平均値。男女比が1:1であれば平均は0.5となるところであるが、全サンプルの平均は、0.457であった。

第4表 各クラスタの因子得点ないし回答選択肢の平均値

	第1グループ	第2グループ	第3グループ	第4グループ	第5グループ	第6グループ
情報経路						
一般メディア系	1.788	-0.407	-0.408	-0.422	-0.302	0.210
専門情報系	-0.008	-0.213	-0.227	0.033	1.640	0.159
地縁情報系	0.211	-0.167	-0.009	0.141	0.090	-0.039
家族・友人系	0.051	-0.100	0.005	-0.011	-0.041	0.443
教員・キャンパス系	-0.298	0.045	0.215	0.080	-0.407	-0.022
関心分野						
福祉・医療系	-0.071	-0.148	-0.073	0.111	-0.191	1.356
多文化共生系	-0.086	-0.159	0.037	0.025	0.354	0.533
高齢者福祉系	0.047	-0.340	-0.328	1.654	-0.333	-0.109
災害・環境系	0.101	-0.208	-0.105	0.197	-0.097	1.015
まちづくり系	-0.007	-0.032	0.017	-0.132	0.168	0.318
基本属性						
入学前後のボランティア活動経験	1.992	1.183	3.230	2.447	2.125	1.870
性別	0.417	0.419	0.480	0.553	0.589	0.304
サンプル数	132	246	200	103	56	46

第5表 グループ別重回帰式の有意水準

	第1グループ	第2グループ	第3グループ	第4グループ	第5グループ	第6グループ
成果意識						
身近な地域への関心	0.895	0.658	0.217	0.108	0.215	0.512
感謝	0.789	0.436	0.345	0.553	0.352	0.950
出会い	0.255	0.322	0.107	0.411	0.801	0.572
楽しさ	0.873	0.479	0.045 **	0.772	0.445	0.547
企画・調整	0.383	0.591	0.003 ***	0.188	0.082 *	0.477
社会への理解	0.019 **	0.430	0.323	0.304	0.409	0.079 *
自信	0.366	0.349	0.229	0.122	0.103	0.094 *
自己表現	0.496	0.344	0.001 ***	0.194	0.222	0.240
キャリアビジョン	0.361	0.207	0.000 ***	0.216	0.510	0.946
社会的評価	0.876	0.123	0.003 ***	0.165	0.022 **	0.559
問題解決能力	0.643	0.569	0.048 **	0.199	0.009 ***	0.591
人間関係	0.605	0.067 *	0.162	0.239	0.121	0.418

\*\*\* : p&lt;0.01, \*\* : p&lt;0.05, \* : p&lt;0.1

回帰分析を行った<sup>6)</sup>。第5表は、得られた重回帰式の有意水準を示したものである。以下では、有意水準が10%未満の重回帰式について検討を行う。

#### (1) 第1グループ

第1グループでは、「社会への理解」を従属変数とする重回帰式が、それぞれ10%未満有意水準となっている。

第6表に拠れば、「社会への理解」は、「専門情報系」「地縁情報系」で標準化係数の絶対値が大きくなっている。ボランティアに関する専門情報を通して、いままで学生が知らなかった

社会の一面を知る機会を得たとみることができ。他方で、学生が知っている社会の一面は「地縁情報系」によって供給される可能性が高い。

前項の類型化の段階で、第1グループは、「一

第6表 第1グループの重回帰式 (p&lt;0.1)

	「学び」の成果意識
	社会への理解
	標準化係数 $\beta$
一般メディア系_情報	.113
専門情報系_情報	.321 **
地縁情報系_情報	-.256 *
家族・友人系_情報	-.123
教員・キャンパス系_情報	-.012
福祉・医療系_関心	-.098
多文化共生系_関心	.182
高齢者福祉系_関心	-.129
災害・環境系_関心	.032
まちづくり系_関心	-.112
入学前後のV経験	.097
性別	.195
重回帰式の相関係数	0.598 **

\*\*\* : p&lt;0.01, \*\* : p&lt;0.05, \* : p&lt;0.1

6) 当該12独立変数については、既述のとおり多重共線性を生じる危険性はごく小さいことを確認している。また、12独立変数と12従属変数との間についても、相関係数行列を作成したところ、多重共線性を生じるような絶対値の大きな相関係数は、10%有意水準で検出されなかった。

般メディア」からの情報によって活動する蓋然性が高いグループと推察された。「専門情報系」を提供することで社会への理解も深まる傾向が看取されるので、ボランティアセンターや受入先での情報提供や活動プログラムの「作り込み」の成否が「学び」の成果意識に影響を与えるものと考えられる。

## （２）第２グループ

第２グループでは、「人間関係」を従属変数とする重回帰式が、それぞれ10%未満有意水準となっている。

第７表に拠れば、「人間関係」は、「教員・キャンパス系」「高齢者福祉系」「一般メディア系」「地縁情報系」「家族・友人系」「専門情報系」で絶対値が大きい。教員やキャンパス内の情報源を通して高齢者福祉系の活動を経験し、「人間関係」を学んだとみることができる。情報源や関心分野がかなり特定されていることから、講義などを通じた知識の吸収を通して、座学で得た知識を持って、高齢者と接してみたところ、対人援助的な活動が多くなると考えられる分野だけに、生身の人間相手のボランティア活動の難しさを感じたということなのであろうか。

前項の類型化の段階で、第２グループは、ボランティア活動そのものにあまり関心を抱いて

いないグループであると推察された。講義などを通じた知識から高齢者福祉に関心を持ってボランティア活動に取り組んでみたところ人間関係の難しさを感じ取るという「従順な」一面が見られる。

## （３）第３グループ

第３グループでは、「楽しさ」「企画・調整」「自己表現」「キャリアビジョン」「社会的評価」「問題解決能力」を従属変数とする重回帰式が、それぞれ10%未満有意水準となっている。

第８表に拠れば、ボランティア活動を通じた「学び」の成果意識で「楽しさ」をあげるのは、このグループにおいては女性ほどその傾向が強いと考えられる。「企画・調整能力」は、「多文化共生系」「災害・環境系」「入学前後のボランティア活動経験」で標準化係数の絶対値がやや大きくなっている。国際協力や人権、平和に関するボランティア活動をしたことが、「企画・調整能力」という学びに影響を与えているものと考えている。環境分野にはあまり関心がないようだ。「自己表現」は、「福祉・医療系」「多文化共生系」「入学前後のボランティア経験」「災害・環境系」で標準化係数の絶対値がやや大きくなっている。福祉分野や国際協力や人権、平和に関心を持ってボランティア活動を行なうことで「自己表現」という「学び」の成果意識に結びついていることが考えられる。「キャリアビジョン」は、「一般メディア系」「多文化共生系」「災害・環境系」「入学前後のボランティア活動経験」で標準化係数の絶対値がやや大きくなっている。新聞やテレビなどで報じられる国際的な課題に、「自分にもできることはないか」という問題意識や関心の持ち方が想起され、それが実際の活動に結びついた結果、自分の将来設計の描きに対して影響を与えるような「学び」を獲得したと考えられる。「社会的評価」は、「災害・環境系」「入学前後のボランティア活動経験」で標準化係数の絶対値がやや大きくなって

第７表 第２グループの重回帰式（ $p<0.1$ ）

	「学び」の成果意識
	人間関係 標準化係数 ベータ
一般メディア系_情報	-.683 ***
専門情報系_情報	-.408 **
地縁情報系_情報	-.523 **
家族・友人系_情報	-.426 *
教員・キャンパス系_情報	.630 **
福祉・医療系_関心	-.223
多文化共生系_関心	.038
高齢者福祉系_関心	.411 *
災害・環境系_関心	.153
まちづくり系_関心	-.215
入学前後のV経験	.043
性別	-.192
重回帰式の相関係数	0.642 *

\*\*\*:  $p<0.01$ , \*\*:  $p<0.05$ , \*:  $p<0.1$

第8表 第3グループの重回帰式 ( $p<0.1$ )

	「学び」の成果意識					
	楽しさ	企画・調整	自己表現	キャリアビジョン	社会的評価	問題解決能力
	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ
一般メディア系_情報	-.133	.052	.004	.262 **	.085	.116
専門情報系_情報	.033	.098	.053	.141 *	-.008	.117
地縁情報系_情報	-.065	-.002	.088	.121	.007	.058
家族・友人系_情報	.047	.041	.074	.059	.008	.016
教員・キャンパス系_情報	.099	-.050	.141	-.188	.081	-.086
福祉・医療系_関心	-.023	.084	.137 *	.085	.102	.023
多文化共生系_関心	.082	.190 **	.128 *	.183 **	.087	.141 *
高齢者福祉系_関心	.096	.050	-.005	.067	.044	.052
災害・環境系_関心	-.029	-.200 **	-.153 *	-.246 ***	-.215 ***	-.179 **
まちづくり系_関心	.051	.019	-.018	-.103	.063	.032
入学前後のV経験	.059	.134 *	.208 ***	.145 **	.126 *	.164 **
性別	.247 ***	.008	-.098	-.025	-.003	-.117
重回帰式の相関係数	0.330 **	0.383 ***	0.398 ***	0.443 ***	0.383 ***	0.329 **

\*\*\*:  $p<0.01$ , \*\*:  $p<0.05$ , \*:  $p<0.1$ 

いる。災害救援や環境といった野外活動を伴うことが多く比較的ハードワークなボランティア活動ではない分野であっても、何らかのボランティア活動を通して、自分自身の社会的評価を向上させることにつながったと学生は考えているようである。「問題解決能力」は、「多文化共生系」「災害・環境系」「入学前後のボランティア経験」で標準化係数の絶対値がやや大きくなっている。国際協力や人権、平和といった分野に関心を持ってボランティア活動を行なう中で、「問題解決能力」を培ったという学生の意識が看取される。

前項の類型化の段階で、第3グループは、教員やキャンパス内の情報源から情報を得てボランティア活動を経験したグループであると推察された。重回帰分析の結果からは、全体として、「多文化共生系」への関心が強く、「災害・環境系」への関心が低い。国際協力や平和、人権分野における活動が、「企画・調整能力」「キャリアビジョン」「問題解決能力」といった学生自身の将来設計の描きに影響を与えるような技術や技能、思考を得ることができるのではないかとみることができる。統計的には「多文化共生系」は、それらの従属変数を制御している可能

性が考えられる。さらに、「医療・福祉系」や「高齢者福祉系」への関心が重なると、「自己表現」といった「学び」の成果意識を制御している可能性が考えられる。国際協力や平和、人権分野への関心は、必ずしも海外フィールドでの活動を意味するものではなく、国内の身近な地域の「内なる国際化」や識字といった暮らしに根ざした問題と結びつきやすい。学生にとって活動しやすいのは、現場が近くにあるということも大きな要因となる。したがって、海外フィールドでのボランティア活動をいきなりコーディネートし、ハードワークを経験させるのも一考だが、身近な地域の暮らしに根ざした人権、平和問題に関わらせるようなコーディネートも一考ではないかと考えられる。いずれにせよ、当該グループは、活動を通して「学び」の成果意識を比較的感受性豊かに体得してくるグループであるとみられる。

#### (4) 第4グループ

第4グループでは、10%未満有意水準の重回帰式を検出することができなかった。代わりにここでは、15重回帰式のうち有意水準が最も低かった「身近な地域への関心」( $p=0.108$ )のみについて、検討しておきたい。

第9表に拠れば、「身近な地域への関心」は、「まちづくり系」で標準化係数の絶対値がやや大きくなっている。福祉・医療，多文化共生といった，まちづくりや環境以外の分野での活動を通して，具体的な人々や集団，組織といった地域経済社会の問題解決に具体的に深く取り組むことで，地域への関心が広がったということが想起される。

前項の類型化の段階で，第4グループは，高齢者福祉系のボランティア活動に従事したことがある，相対的に女子学生が多いグループと推察された。当該グループは103サンプルとやや小さめであることから，少数派であることにも留意が必要であることを物語っているともみることができる。ボランティア活動に従事する学生のすそ野を広げていくための活動はやはり重要で，何らかの誘因が参加につながるのである。

#### （5）第5グループ

第5グループでは，「企画・調整」「社会的評価」「問題解決能力」を従属変数とする重回帰式が，それぞれ10%未満有意水準となっている。

第10表に拠れば，「企画・調整能力」は，「一般メディア系」で標準化係数の絶対値が大きくなっている。新聞やテレビなどから情報を得て

いるわけではないが，活動すれば「企画・調整能力」が身につくという漠然としたイメージを形成していることが考えられる。「社会的評価」は，「福祉・医療系」「一般メディア系」「家族・友人系」で標準化係数の絶対値が大きくなっている。新聞やテレビから情報を得て，福祉分野に関心を持っているケースであるが，実際の活動に参加した学生は少ないものとみられ，活動を通して，社会的評価を向上させる「学び」が得られるとの意識であるとみられる。「問題解決能力」は，「家族・友人系」で標準化係数の絶対値が大きくなっている。身近な人からの情報提供なしに，活動すれば「問題解決能力」が身につくという漠然としたイメージを形成していることが考えられる。

前節の類型化の段階で，第5グループは，ボランティア活動に関する専門情報を得て，活動に従事したことがある，相対的に女子学生が多いグループと推察された。自分自身の社会的評価を上げることにつながったと感じている学生は，専門情報よりもむしろ「一般メディア系」の影響を受けている。女子学生が多いというこのグループの特性を考えると首肯できるが，「関心分野」も福祉分野に限定的である。当該グループにおいては，第1，2，3グループに比べ，多様な情報源とも距離を取っている傾向も想起されるため，ボランティアセンターに限らず，すそ野の広い広報・啓発的情報提供も重要と考えられる。

#### （6）第6グループ

第6グループでは，「社会への理解」「自信」を従属変数とする重回帰式が，それぞれ10%未満有意水準となっている。

第11表に拠れば，「社会への理解」は，「福祉・医療系」「入学前後のボランティア活動経験」で標準化係数の絶対値が大きくなっている。ボランティア活動に参加した経験が少ないが，福祉系の活動に参加したことが，「社会への理解」

第9表 第4グループの重回帰式 (p=0.108)

	「学び」の成果意識 身近な地域への関心
	標準化係数
	ベータ
一般メディア系_情報	.054
専門情報系_情報	.028
地縁情報系_情報	-.017
家族・友人系_情報	-.066
教員・キャンパス系_情報	-.143
福祉・医療系_関心	.147
多文化共生系_関心	.166
高齢者福祉系_関心	.111
災害・環境系_関心	-.145
まちづくり系_関心	-.282 *
入学前後のV経験	-.096
性別	-.209
重回帰式の相関係数	0.528

\*\*\* : p<0.01, \*\* : p<0.05, \* : p<0.1

第10表 第5グループの重回帰式 ( $p<0.1$ )

	「学び」の成果意識		
	企画・調整	社会的評価	問題解決能力
	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ
一般メディア系_情報	-.477 **	.424 **	-.098
専門情報系_情報	-.137	-.158	.081
地縁情報系_情報	-.063	-.116	.095
家族・友人系_情報	-.220	-.429 *	-.436 **
教員・キャンパス系_情報	-.040	.002	.011
福祉・医療系_関心	.326	.769 ***	.378
多文化共生系_関心	-.063	-.075	-.331
高齢者福祉系_関心	-.008	.296	.200
災害・環境系_関心	.281	.037	.189
まちづくり系_関心	-.179	-.069	.114
入学前後のV経験	-.126	-.343	-.141
性別	.127	-.064	.083
重回帰式の相関係数	0.739 *	0.789 **	0.816 ***

\*\*\* :  $p<0.01$ , \*\* :  $p<0.05$ , \* :  $p<0.1$ 第11表 第6グループの重回帰式 ( $p<0.1$ )

	「学び」の成果意識	
	社会への理解	自信
	標準化係数 ベータ	標準化係数 ベータ
一般メディア系_情報	.182	1.119 **
専門情報系_情報	-.056	.665 **
地縁情報系_情報	.034	.156
家族・友人系_情報	-.037	-.493
教員・キャンパス系_情報	.538	.926 **
福祉・医療系_関心	.817 **	.295
多文化共生系_関心	.227	.208
高齢者福祉系_関心	-.485	-.291
災害・環境系_関心	.437	.417
まちづくり系_関心	-.301	-.367
入学前後のV経験	-.614 **	-.246
性別	-.386	-.068
重回帰式の相関係数	0.823 *	0.815 *

\*\*\* :  $p<0.01$ , \*\* :  $p<0.05$ , \* :  $p<0.1$ 

という「学び」の成果意識につながっていると考えられる。「自信」は、「一般メディア系」「教員・キャンパス系」「専門情報系」で標準化係数の絶対値が大きくなっている。新聞やテレビなどのほか、キャンパス内の情報源、ボランティア活動に関する専門情報にも接しているが、活動経験はそう多くない。その中でも、多様な情報源に接して活動を開始したことが「自信」につながっているということであろうか。

前項の類型化の段階で、第6グループは、身近な人間関係から情報を得て、福祉や環境分野に関心を持っているものの活動経験はあまりな

い、相対的に男子学生が多いグループであると推察され、最も小さい46サンプルであった。有意な重回帰式においては、「家族・友人系」は有意な係数として析出されなかった。当該グループは、身近な人からの情報提供のほかにも、活動につながる情報源は多様に持っている可能性がある。しかし、活動への参加には結びついていない。活動への参加につながれば、「社会への理解」や「自信」といった「学び」の成果意識を抱く可能性があるため、実際の活動につながるような具体的な情報提供が必要なのではないかと考えられる。他のグループでもみられ

たように、活動に参加すれば、「学び」の成果意識も変容する可能性は当該グループにおいても当てはまるものであろう。特に、「社会への理解」は、ボランティア活動経験が少なければ少ないほど、その貴重な経験から、「学び」の成果意識につながっている。当該グループにおいては、参加に直接結び付きやすい情報提供の仕方や工夫が求められるのではなかろうか。

## 第6節 おわりに

山田・井上（2009）では、クロス集計結果から、「入口」イメージと「学び」の成果意識の関係、活動を継続する意味、活動分野による差異について検討してきた。「入口」イメージと学びの成果意識の関係については、「楽しい」という「入口」イメージは、学生がボランティア活動に従事するきっかけとして重要である。「楽しい」イメージは、他の活動者とのコミュニケーションを促進し、人間関係や企画調整の難しさを感じつつも、足元の地域課題への気づきを促すのであろう。「責任感」という「入口」イメージは、自己表現のためには企画・調整能力が求められることに気づくのであろう。「達成感」「自分が成長する」「社会の役に立つ」といった「入口」イメージは、他者からの感謝が自分自身に自信を持つことに関わっているようだ。

本稿では、多変量解析を用いて、山田・井上（2009）の分析をさらに深めることに取り組んだ。行動を惹起させる情報源を「経路」とし、ボランティア活動に取り組みたいと考えている分野を「関心分野」とし、それぞれについて因子分析を行った。さらに、各サンプルが得る因子得点と、入学前後のボランティア活動経験を「経験」とし、それに性別を加えた変数でクラスタ分析を行い、学生像の類型化を行った。その上で、それぞれのグループについて、「学び」

の成果意識との関連を検討するため、重回帰分析を行った。

第1グループは、「一般メディア」からの情報によって活動する蓋然性が高いグループである。また、「専門情報系」を提供することで社会への理解も深まる傾向が看取され、ボランティアセンターや受入先での情報提供や活動プログラムの「作り込み」の成否が「学び」の成果意識に影響を与えるものと考えられる。第2グループは、ボランティア活動そのものにあまり関心を抱いていないグループであるが、身近な人たちの体験談を含めた情報提供や、実際に活動を経験してみることによって、講義や演習などにおける教員からの助言やそれらの中で、「擬似的に」ボランティア活動を経験させてみることも一つの手段として有効ではないだろうか。第3グループは、全体として、「多文化共生系」への関心が強く、「災害・環境系」への関心が低い。国際協力や平和、人権分野における活動が、「企画・調整能力」「キャリアビジョン」「問題解決能力」といった学生自身の将来設計の描きに影響を与えるような技術や技能、思考を得ることができるのではないかとみることができる。第4グループは、高齢者福祉系のボランティア活動に従事したことがある、相対的に女子学生が多いグループである。そのような学生は当該グループが103サンプルとやや小さめであることから、少数派であることに留意が必要であることを物語っているともみることができる。第5グループは、ボランティア活動に関する専門情報を得て、活動に従事したことがある、相対的に女子学生が多いグループである。第6グループは、もっとも小さい46サンプルである。身近な人からの情報提供のほかにも、活動につながる情報源は多様を持っている可能性がある。しかし、活動への参加には結びついていない。活動への参加につながれば、「社会への理解」や「自信」といった「学び」の成果意識を抱く

可能性があるため、実際の活動につながるような具体的な情報提供が必要なのではないかと考えられる。

以上の分析結果から、ボランティア活動を通じた学生の「学び」の成果意識について、ボランティアセンター等のサービスラーニングを提供ないし支援する主体の活動を、第1図に示した分析視角に基づいてモデル化することができたのではないかと考える。このような類型化によって、学生が抱く興味・関心も異なり、またボランティアに期待する成果も異なる学生に対して、それぞれに即した対応が可能となる。たとえば、ボランティアに関する情報発信の方法、用意するプログラムのあり方などといったことである。コーディネーターは、経験的にボランティア活動によって導き出される学びや効果を勘案して、学生のニーズと関心をもつボランティア活動をマッチングさせていく。こうした経験に基づいた取り組みはコーディネーションにおいてもとりわけ属人的なものであり、今までその連関のメカニズムは明らかにされてこなかった。本稿における「経路」と「学び」の成果意識の連関に関する知見は、コーディネーションにおける理論的補強となる。それは、経験の浅いコーディネーターにとって、プログラムの「作り込み」において大きな示唆を与えるものである。つまり、これは教育としてのボランティアプログラムを展開するにあたり、学生が期待するさまざまな学びの目標を達成するためのプログラムの「作り込み」を地域経済社会と教育機関が協働して行う際の一つの試金石となるものになるであり、「職人技」としてのコーディネーションから、「組織技」、システムとしてのコーディネーションへの第一歩となるはずである。地域課題への気づきや学生自身の将来設計を助長する上で、サービスラーニングの構造化された学習機会が重要であることはいうまでもないが、本稿で提示したモデルは、受け入れ

側である地域社会のアクターと送り出し側である大学のアクターが、どのような教育目的を持って、どんな学生に学習目標を立てさせるのか、というプログラムとしてのサービスラーニングの「作り込み」をいかに協働で行なうべきか、あるいはいかにコーディネートすべきかに資するものであると考えている。実践面と合わせ、モデルの精緻化は今後の課題としたい。

## 引用文献

- Jacoby, B. (1996) Service-Learning in Today's Higher Education. in B. Jacoby et al. *Service-Learning in Higher Education*. Jossey-Bass Publishers. 3-25.  
 バーバラ・ジャコビー著、山田一隆訳 (2007) こんにちはの高等教育におけるサービスラーニング. 龍谷大学経済学論集, 47(1/2), 43-61.  
 レイブ・J.・ウェンガー・E.著、佐伯胖訳 (1993) 「状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加」. 産業図書.  
 溝上慎一 (2004a) 「現代大学生論 ユニバーシティ・ブルーの風にゆれる」. 日本放送出版協会.  
 溝上慎一編 (2004b) 「学生の学びを支援する大学教育」. 東信堂.  
 溝上慎一 (2006) 「大学生の学び・入門 大学での勉強は役に立つ!」. 有斐閣.  
 文部科学省 (2002) 「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について (答申)」.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/001/020702a.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/001/020702a.htm) (2007年10月14日現在)  
 文部科学省 (2005) 「我が国の高等教育の将来像 (答申)」.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013101.htm) (2007年10月14日現在)  
 文部科学省 (ND) 「国公立大学を通じた大学教育改革の支援」.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/index.htm) (2007年10月14日現在)  
 日本学生支援機構 (2005) 「大学等におけるボランティア情報の収集・提供の体制等に関する調査報告書」.  
 日本高等教育学会 (2008) 「高等教育研究第11集 大学生論」. 玉川大学出版部.



立命館大学ボランティア・サービスラーニング研究会  
(2007)「立命館大学ボランティア・サービスラーニング研究会ニューズレター」. 1, p4.

桜井政成 (2007)「地域活性化ボランティア教育の深化と発展」：サービス・ラーニングの全学的展開を目指して. 立命館高等教育研究, 7, 21-40.

桜井政成・山田一隆 (2009) 日本の高等教育におけるボランティア活動支援・サービスラーニングの現状. 津止正敏・桜井政成編「ボランティア教育の新地平」. ミネルヴァ書房. (印刷中)

佐藤望編著, 湯川武・横山千晶・近藤明彦 (2006)「アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法

入門」. 慶応義塾大学出版会.

佐藤進 (2000) 学生の「経済的経験」を考える——経済学教育を受ける主体的前提について——. 経済論叢別冊 調査と研究, 19, 1-9.

山田一隆・井上泰夫 (2009) ボランティア活動から学生は何を学ぶのか 2007年度立命館大学学生調査を事例として. 津止正敏・桜井政成編「ボランティア教育の新地平」. ミネルヴァ書房. (印刷中)

(2009. 2. 25 受稿) (2009. 5. 13 受理)